

二〇二五年度 一般選抜 学力検査(国語)

現代の国語、言語文化  
(古文・漢文を除く)

解答番号

1

〜

29

一 問題文を読んで次の問1～問9に答えなさい。

「御一新」の嵐は、ありとあらゆる分野に吹き荒れた。なかでも、それまでの日本人の生活を一夜にして変えてしまった改革がある。明治改暦である。

明治新政府は、明治五年（一八七二）にある歴史的な変革を断行する。太陰太陽暦から太陽暦（グレゴリオ暦）への移行である。このフコク(7)によって、明治五年十二月二日の翌日は、明治六年一月一日となる。いきなり師走(8)をすっ飛ばして元旦になってしまったのだ。国民の困惑と社会の混乱はいうまでもないが、これはたんにそれまでの日本式の暦を西欧風に変えたという単純な話ではない。<sup>(1)</sup>日本人のなかに脈々と流れてきた生活感覚のリズムとテンポが完全に破壊されてしまったからだ。

江戸時代までの日本の一日は、十二の刻に分けられ、人々の生活は、おおむね太陽の動きに沿っていた。日の出まへの薄明るくなった時が明六ツ(9)、日没後のまだ薄明るい黄昏時(10)が暮六ツ。これが昼と夜の境目となる。そして明六ツから暮六ツまでの昼の時間と、暮六ツから明六ツまでの夜の時間をそれぞれ六等分したのが一刻(11)である。

一日を十二等分すれば、一刻はざっと二時間となる計算だが、夏は昼の長さが長く、夜の長さが短いので、昼の一刻は長く夜の一刻が短くなる。このように **A** 不定時法と呼ばれる。当時の和時計はこの不定時法に対応して、重りや文字盤に工夫がこらされていた。この時計に基づき、太鼓や鐘を打つ数で時が知らされた。つまり時間は伸び縮みしていたのだ。

ところが、太陽暦によって一日は二十四時間にきちんと分けられ、一時間は六十分、一分は六十秒となれば、伸び縮みしていた時間は均一になり、太陽の光で夜明けとともに目覚める生活は、現代のように目覚まし時計のけたたましい音に叩き起(12)こされる生活となる。

どちらがいいか悪いかという問題ではないのかもしれないが、少なくとも身体にとっては、夜明けの光を浴びて目覚めた方が健康にはよさそうだ。だが、なによりも **B** は、この改暦からはまったのである。

そして、これは音楽とも密接なかわりがある。生活にも用いられる「リズム」や「テンポ」という言葉からもわかるように、時代のリズムやテンポが変われば、音楽もまた変わるものだからだ。

楽曲の長さにしてもそうだ。やや乱暴な比較だが、十九世紀初期の交響曲は平均約三〜四十分。それが現代の歌謡曲は約五分。音楽作品をひとつの時代表現とするならば、十九世紀に三十分かけて表現したものを、いまは五分で表現していることになる。もつとも、そのなかで何を表現するのかが別問題だが――。

音楽だけでなく、日本のすべてが西欧化していくなかで、この改暦が与えた影響は、はかりしれないとぼくには思えてしかたがない。日本の音楽がいかに変わっていったかについては、これから辿たづっていくが、たとえばさまざまな要因で社会が変わらなければならなかったとしても、もし時間感覚と生活リズムが江戸時代のままであれば、何もかもがここまで劇的に変わることはなかったはずなのだ。

たとえば「御一新」が、万事を一新する！ という気構えの時代だったにせよ、そのシン(1)プクはじつに大きかった。欧米崇拜的なものもあれば、その反動で国粹主義的に走ったものもある。音楽は、そのふたつのあいだで揺れ動きながらも、結果的には欧米崇拜型の典型ともいえるような変貌を遂げる。

だが、そもそもなぜ日本の音楽が西欧化しなければならなかったのか？ 日本古来の音感覚に馴染なじんだ日本人の身体や耳が、いかにして西欧音楽の音感やリズムに馴染なじんでいったのか？ この問いは、この本を書くためのもつとも大きなもののひとつだった。それを知るために過去に遡ると、幕末から明治にかけて日本に導入された西欧音楽は、いまのぼくたちが鑑賞し趣味として楽しむような音楽とは、まるで違うものだったことが見えてくる。

それは、文化や芸術としての音楽ではない。制度としての音楽である。西欧の楽器も西欧特有のリズム(2)も、センリツ(3)も、はじめは軍事制度の一部として日本にもたらされたのだ。

開国前後の十九世紀後半、日本をとりまく国際情勢は、西欧列強による帝国主義的な植民地政策の真つ只中ただなかにあった。次々と植民地化されていく近隣諸国をまのあたりにした日本の為政者たちは、とにかく国民が一致団結して富国強兵に邁進まいしんし、欧米を手本とした文明国家を目指すことが植民地にならずに生き延びるための唯一の道だと信じた。であれば、西欧文明の導入はまずは西欧式の軍事制度を導入することもあつたはずだ。なぜなら、これこそが国家存亡にかかわる喫緊やくきんの課題だつたからである。

小泉八雲の名で知られる明治の作家ラファディオ・ハーンの記事に「明治初期の日本人は二拍子の行進ができなかつた」と書かれていたのを読んだ記憶がある。外国から来たハーンが奇異に感じたように、当時の日本人は、イッチニ、イッチニと足並みを揃そろえて行進することができなかつた。というよりもその必要も習慣もなかつた。

大勢の人間が左右の足を揃そろえて整然と行進することは、そもそも本来の人間の歩行スタイルから見れば不自然だ。ひとりひとりの人間は一步あたりの歩幅も異なれば歩行速度も異なるから当然だ。ところが訓練によつてそれを **C** し、足並みを揃そろえた歩行を強要しなければならぬ時代がやつてくる。それが西欧式の近代軍事制度の導入だつた。

<sup>(4)</sup> 西欧式の近代軍事制度を導入するとはいへ、それは外国の艦隊に対応できる最新式の大砲や小型銃を備えることだけではな  
い。その銃を持った兵士たちをいかに命令で整然と動かすか。そして作戦を着実に遂行するか、という軍隊の構成要員たる兵隊  
を組織するための訓練が不可欠となつてくる。

それまでの日本の兵法思想では、そのような集団戦闘に備えた歩行訓練を考える必要はなかつた。そもそも武士の伝統的な歩  
行スタイルは、すり足である。洋靴が導入されるまでの日本人の履物が草履や下駄げただつたことを思えば、それが西欧式の歩き方  
に適していないことは明らかだ。そのような日本人のための西欧式軍事訓練の第一歩が「足踏み訓練」、すなわち行進の練習だつ  
た。そして、その訓練のために導入されたのが行進曲であり、それを演奏する軍楽隊であつた。

幕末の戊辰戦争ぼしんのとき、すでに幕府軍はかなりのラップ手を育成し、倒幕軍には鼓笛隊があつたというが、そこにはすでに江

戸時代までの「戦」ではなく、近代西欧的な「戦争」の風景が展開していたことになる。

つまり、幕末から明治にかけての西欧音楽の導入は、趣味や娯楽のためではなく、また、芸術音楽を鑑賞するためでもなく、幕府や新政府による強兵策の一環としての軍楽隊の導入、すなわち文化としてではなく制度としての導入だった。

制度としての導入という意味では「足踏み訓練」に欠かせない靴や、軍隊のユニフォームである軍服も同じだ。調べてみると、日本に洋服や靴が導入されたのは、音楽と同じように軍隊が最初だった。靴は当初は「靴」ではなく「沓」と呼ばれ、しかも訓練用の履きものということで「伝習沓」と呼ばれたらしい。

ファッション文化の象徴のように思われている洋服と靴の歴史すらも、ともに軍服と軍靴という軍事制度からはじまったというの、文明や文化の何もかもが戦争と結びつくようで、やや複雑な気分になる。

いっけん軍事制度とは何の関係もないようにみえる絵画の世界でもそうだ。軍隊では、西洋の視覚認識である幾何学的な遠近法の習得が重視され、なかでも陸軍士官学校は図画教育に力を入れた。写真がまだ発展途上だった時代に、軍事上の地形の見取図や地図の作成に西欧的な写生能力が必須だったためだ。

美術も作品としての鑑賞より、まずは実利に直結する科学として学ぶことが最初だった。歩行訓練としての西洋音楽の導入も、洋服も靴も絵画もみな同じである。

(浦久俊彦『ペーターヴェンと日本人』による。)

## 問1

傍線部(ア)～(ウ)と同じ漢字を含む熟語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、  
1 ～  
3。

(配点6点)

(ア) フコク

1

- ① 家にサイフを忘れてきた。
- ② 父のフヨウ家族となっている。
- ③ 自然の力にイフの念を抱く。
- ④ 運転免許証がコウフされる。
- ⑤ 新たな解決策がフジョウする。

(イ) シンプク

2

- ① 主君に仕えるシンカ。
- ② 初めて会った人なのになぜかシンキン感が湧く。
- ③ 確かなシンビ眼を養いたい。
- ④ 政府は働き方改革のホウシンを示した。
- ⑤ 近くを通る電車のシンドウが伝わってくる。

(ウ) センリツ

3

- ① 報道で大事なのは情報のセンドだ。
- ② 彼の研究は学会にセンブウをまき起こした。
- ③ 八世紀には何度もセントが実施された。
- ④ 缶詰をユセンして温める。
- ⑤ 食物センイを摂るよう心がける。

問2

空欄

A

く

C

を補うのに最も適当なものを、次の各群の①く⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、

4

く

6

。

(配点6点)

A

4

- ① 太陽暦を採用していた時代の時計は
- ② 冬の夜の一刻が二時間より長くなるので
- ③ 一刻の長さに法則性がないことから
- ④ 季節に応じて一刻が変化するので
- ⑤ 昼と夜の境目が明確でないことから

B

5

- ① 行進曲を基本とした新しい音楽
- ② 健康に悪影響をもたらす目覚め
- ③ 「時」に縛られる現代人の生活
- ④ 機械文明の利便性による恩恵
- ⑤ 極度の国粹主義に走る「御一新」

C

6

- ① 均一化
- ② 理論化
- ③ 恒久化
- ④ 深度化
- ⑤ 分散化

## 問3

傍線部X・Yの語の文章中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、7・8。

(配点4点)

X まのあたりにした

7

- ① ふがない思いで見くだしていた
- ② 自らの手中に収めて利益を得た
- ③ 現実を突きつけられた
- ④ 救済するタイミングを逃した
- ⑤ 常に批判的な眼<sup>め</sup>で見つづけていた

Y 喫緊の

8

- ① 慎重に時間をかけるべき複雑な
- ② 戦闘でしか解決できない重大な
- ③ 十分に満足できる結果が得られた
- ④ 外部の力を借りてでも突破したい
- ⑤ 何よりも優先的に対応すべき

#### 問4

傍線部(1)「日本人のなかに脈々と流れてきた生活感覚のリズムとテンポ」とあるが、どのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、9。(配点5点)

- ① 和時計を初めとして太鼓や鐘など独自の文明の所産に基づき、聴覚的に時間を認識する生活感覚。
- ② 夜明けと日没を基準に分けられた時刻に沿って季節に合わせた寝起きをする、自然に従った生活感覚。
- ③ 現代の一時間ではなく倍の二時間にあたる「一刻」を時間の最小単位とする、のんびりした生活感覚。
- ④ 一年最後の月となる師走もきちんとひと月が割りふられ、季節感を日々感じることでできる生活感覚。
- ⑤ 昼間の太陽が照らす方向が変化していくのに従って、仕事や家事を行う時間が伸び縮みする生活感覚。

#### 問5

傍線部(2)「この改暦が与えた影響」として筆者が考えているのはどのようなことか。その説明として適当でないものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、10。(配点5点)

- ① 生活のリズムやテンポが変わることで音楽のリズムやテンポも変化し、楽曲の長さにまで変化があった。
- ② 太陰太陽暦から太陽暦に変わるにより、明治五年の十二月は極端に短く、元旦になり国民が困惑した。
- ③ おおむね太陽の動きに沿っていた江戸までの人々の生活感覚が破壊され昼夜の境目と時刻が一致しなくなった。
- ④ 不定時法に対応した和時計では、季節によって時間が伸び縮みしていたが、太陽暦により時間が均一になった。
- ⑤ 時間感覚をはじめ何もかもが劇的に変わり明治以降夜明けの光の中での目覚めがなくなり、人々が不健康になった。

## 問6

傍線部③「欧米崇拜型の典型ともいえるような変貌」とあるが、どのような変貌か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、11。

(配点6点)

- ① 日本国民が一致団結して西欧諸国を手本とした富国強兵に励み、国力の高い軍事国家となるばかりか、やがて近隣諸国を自国の植民地とするほど西欧諸国と肩を並べるに至ったということ。
- ② 日本人が従来からあつた音感覚に加えて西欧音楽の音感やリズムにも馴染み、異なる二つの音楽の間を揺れ動きつつ最終的に融合されることによって、新たな時代表現となったということ。
- ③ 日本にも太陽暦が導入されたことで、欧米の国々で信仰されている宗教に使用される音楽とその音感覚が日本にも根付き、「時」を中心とした生活をする現代人に潤いを与えたということ。
- ④ 日本が欧米の国々を手本とした文明国家となつて生き延びるため、西欧式の軍事制度を導入することとし、その制度の一部として音感もリズムも西欧になつた音楽になつたということ。
- ⑤ 明治初期には足並みを揃えた二拍子の行進ができなかつた日本人が、軍隊の訓練で強要された結果とはいへ整然と行進する自然な歩行スタイルとリズム感を獲得することができたということ。

## 問7

傍線部(4)「西欧式の近代軍事制度を導入するとはいえ、それは外国の艦隊に対応できる最新式の大砲や小型銃を備えることだけではない」とあるが、そのほかにどのようなものが必要となったのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

12。

(配点6点)

- ① 草履や下駄などの履物の使用ですり足が染みついてきた日本人の歩行スタイルを、正しいものに矯正するために実施に移された「足踏み訓練」など。
- ② 兵士たちが命令に忠実に従って整然と動くこととその訓練を施すのに必要となる、日本の兵法思想に基づいた忠誠心や、集団戦闘における作法など。
- ③ 西欧式の軍事訓練に不可欠な行進練習に使われる、西欧音楽のリズムを用いた行進曲などの導入とその演奏者の育成のほか、西欧風の靴や軍服など。
- ④ 機動力のある軍隊を作るための、ひとりひとり異なる歩幅や歩行速度を合わせ、全員が等拍のテンポで一斉に移動できるリズム感など。
- ⑤ 江戸時代までの「戦」とは異質なものであることを兵士に感得させるため、西欧的な「戦争」の風景を演出する意図で起こされた戊辰戦争などの戦闘。

## 問8

傍線部(5)「作品としての鑑賞より、まずは実利に直結する科学として学ぶ」とあるが、どのようなことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、13。

(配点5点)

- ① 日本の絵画の手法に西欧の写実性を採り入れることで、写真という文化を完成させるのに寄与したということ。
- ② 西洋の美術は、遠近法を用いた地図の作成の実現による軍事力の向上を意図して導入されたということ。
- ③ 明治時代の日本における絵画や彫刻は、芸術性よりも売却益を多く得ることを計算して制作されたということ。
- ④ 江戸時代になかった絵画という美術分野を日本に導入するにあたり、西欧の幾何学の知識が必要だったということ。
- ⑤ 西洋の絵画は、真の芸術としてでなく、利益の発生する商業芸術の一環として学ばれたということ。

## 問9

本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、14。

(配点6点)

- ① 明治五年に新政府によって断行された太陰太陽暦からグレゴリオ暦への改暦のことが、「御一新」と呼ばれている。
- ② 太陽暦の採用で季節による時間の伸び縮みがなくなった結果、当時の多くの日本国民が健康を害することとなった。
- ③ 日本の音楽が西欧化したのは軍事的な意図を持った国策によるものであり、改暦とは関係なく起きたものである。
- ④ 西洋音楽に接していたハーンにとって、日本人が行進できないことが不可解な事態であったことが想像できる。
- ⑤ 現代では定着している西洋風の服や靴が軍事制度によってもたらされたことを、筆者は積極的に評価している。

二 問題文を読んで次の問1～問9に答えなさい。

「文明」は「技術」と同じように規格品づくりですが、「文化」はその地域固有のもので、はるか太古の昔はそれぞれの土地の木や石を使っていたのが、現代では新しい技術によってどこでも同じ鉄やセメントを使うようになり、文明化し、画一的になっています。A、今まで人類がこの限られた地球上で、長いのちの歴史の中でさまざまな自然災害、種族内での争いを繰り返しながらも今まで生き延びてきたのは、その地方、その民族固有の人間活動があり、試行サクゴ(ア)をくり返しながらもそれぞれの地域固有の成果を築いてきたからなのです。それが「文化」の基本的な姿なのです。

私たちは新しい技術によって、最高の画一的な都市や産業立地、人工環境、エネルギーをつくってきました。世界中でコココーラを飲み、マクドナルドやフライドチキンを食べています。このようにまったく同じもの、規格品をつくってきたのが「文明」であり、<sup>(1)</sup>死んだ材料(イ)を使つての技術の結果でした。これらは現在の豊かな生活を支えるために役立ってはいまずし、今後も必要です。しかし、このような物質文明、技術とは何か、長い時間をかけて築いてきたそれぞれの地方固有の文化とは何かを、もう一度見直すべきではないでしょうか。

規格品づくり、人の真似(まね)は必要最小限にして、自分の顔は自分しかもっていないように、自分しか持つていない能力を發揮し、生き方を考え、人生観をもつべきではないでしょうか。さまざまな課題にむきあう時も、自分でその対応の仕方を考えるべきではないでしょうか。そしてこのことは、いのちを守る木を植える場合にもあてはまるのです。

生物は、保守的です。それは、いのちを守るといふ大事なことでもありますが、とくに、新しい科学・技術が發展して、現在のように世界的に画一化した機械文明が發展していくときには、私たちは新しいことにたいして保守的になる傾向があります。一般に生物本来の一つの特性かもしれませんが、新しい課題や、新しい概念、新しい思いつきにたいしては、保守的なものです。

**B** 現代では、計量主義的な科学・技術が、頂点に達するほど発展しています。したがって、現代の科学・技術で計量的に実証できないもの、いわゆる前例がないものにたいしては、日本の行政のトップにある霞が関の若いカンリヨウのみなさんも含めて、きわめて保守的である。もちろん、今までやってきたことを守ることは非常に大事なことであり、これまでの経験の積み重ねで、現代の私たちのいのも生活も保証されているわけです。

しかし、同時に、自然は常に動いています。<sup>(2)</sup> 地域的にも、広域的にも、同じ所はまったくありませんし、かすかであっても、動いているわけです。

従来の概念、あるいは常識から外れることにたいしては、一般に異端者として扱われる場合が多い。もちろん、新しいものの中には、たしかに多くの、いずれ間違いであることが立証されるであろう仮説や、中には妄想もあるかもしれません。しかし、私たちは、そのような仮説や妄想を具体化することによって、縄文や弥生時代の森の中の生活から、現在、豊かな物質生活、あるいは人工環境の中で、**X** 欲望を満足させ、安住していられます。

植物群落を見る場合でも、あるいは個々の木を見る場合でも、このことはまず認識課題です。つまり、今までやられてきたこと、見たこと、あるいは考えたことにたいしては、たいていの人がその梓の中では納得します。しかし、新しい概念、新しい見方、新しい発想にたいしては、非常にブレーキがかかるのがフツウです。

しかし、そこにとどまっていはいけません。見えるものだけの科学なら、みんながやっていることです。「見えないもの」をも科学の眼で見ようとするのが、本当の科学だと私は思います。「見えないもの」も含めてすべてを見ようとするのが、大事です。

木を植えることは大事ですが、管理費のいらぬ、火事・地震・津波・台風に生き残る本物の森をつくるためには、樹種の選択をまちがえないことです。

**C**、土地本来の潜在<sup>(注2)</sup>自然植生を把握することです。生態学者であっても、まだよく理解してい

ただけない人も多いのです。「見えないものは見えないじゃないか」と。

今、大事なことは、見えるもの、測れるもの、お金で換算できるものだけにこだわらないでいただきたいということです。いのちも、心も、トータルな人間の生存環境も、数字やグラフで表わしきれませんし、お金で買うこともできません。「見えるもの」と同時に、「見えないもの」を見る努力をすべきです。

あの『若きウェルテルの悩み』や『ファウスト』を書いた有名な文豪ゲーテは、同時にすばらしい生物学者でもありました。ゲーテの生家を訪れると、今でもゲーテが実験に使うワインヤ、ライムギ、野菜などを自分でつくっていた、いろんな植物を植えている小さな庭、農園があります。文豪ゲーテは、一方ではすばらしい自然科学者であり、植物学の論文も出しています。彼のもっとも有名な言葉は、「Als Ganzheit」(全体として)です。見えないものを見る力、すべてを全体として見る力をもって対応しなければいけない、ということなのです。

いみじくもゲーテが言ったように、これからは「Als Ganzheit」——すべてを全体として見る必要があります。もちろん、見えるものは大事だし、さらにその測定、計量化、システム化は大事ですが、それだけでは不十分です。『死んだ材料』での橋や建物づくり、都市づくりにはそれでいいかもしれないが、いのちを守る環境をつくる場合はそれだけではだめです。これは、先例がないからやらないのではない、先例がないからこそ、やるべきではないでしょうか。

「潜在自然植生」——私が五十年前にドイツで最初に教わったときに思ったように、これは科学ではない、忍術だと思う方もいらつしやるかもしれません。しかし、本物とは長持ちするものであり、理屈だけではなくて、現場、現場、現場です。ご自身で現場に行つて、自分の身体を測る器械にして、自然がやっている実験結果を、目で見、手でふれ、においを嗅げば、必ず自然はかすかな予知し得る情報を発しています。

これは、森づくりだけではないと思います。本物を見る努力をすること、そして本物と偽物、毒と毒でないものを見分ける動物的な勘、生物的な本能をよみがえ甦よみがえらせ、本気で見れば、必ず見えます。

どうかいのちが失われる前に、環境が破綻する前に、自然が出しているかすかな予兆を見のがさないでいただきたい。現場が発しているかすかな予兆から、見えないものを見、新しい科学的な知見と総合して、新しい文化、健全な生活、未来を創造する努力を足元から進めていただき、まちがいのない未来をつくりたいと思います。

これは七十数年間、もっぱら現場で、国内・海外の千七百か所以上で、足で歩き、目で見、手でふれ、においを嗅ぎ、なめて、さわって調べて、いのちを守る森を、先見性をもった企業、行政、各団体、なによりも市民のみなさんと共に四千万本以上植えて、すべて成功している私の、実感であり自信です。

とくに東日本大震災の被災地では、照葉樹林・常緑広葉樹林帯の北限に近いものですから、当然、最初の冬はきびしいし、三歩前進・一歩後退します。植えて突然、台風が来たり、海の砂をかぶったりすると、たしかに葉が枯れたり落ちたり、一部枯れるのも出てくるかもしれない。しかし、それは **Y**、最初の冬を越し、二年、三年たつて、根が十分土中に入ったら、あとは確実に、一年に一メートル育ちます。その成果をふまえて、私はいのちを守る森づくりを、意欲のあるみなさんと共に進めていきたいと願っています。

ゲーテの時代——十八世紀が終わり、十九世紀になって、今まではただ五感で、自然も人間関係も、あるいは植物との対応を見ていたのが、寒暖計ができ、温度を計ることができるようになりました。また、リトマス試験紙でpHを、酸性かアルカリ性か、などを中心にして測定することができるようになりました。

それから、イギリスの産業革命が起きたところから、**死んだ材料**ではこのように具体的に測定できるデータで対応すべきである、ということになりました。しかし、自然もいのちもトータルな環境も、まだそれだけでは測れません。**D**、すべてを、見えないものを含めて、全体として見るべきである。これがゲーテのすべての著作の、あるいは働きの根本的な哲学であり、科学的な知見であった、とシユミットヒューゼン教授は、私にいつも強く教えてくれました。<sup>(注3)</sup>

そして彼は、にやにやししながら、今はドイツ生まれの現場主義の「エコロギー」も、イギリス、アメリカなどの英語圏内に入って「エコロジー」になるにしたがって、計量科学としてすばらしい発展を遂げている、と言ったものです。もちろん、すべてを、植物が吸収する酸素の量や、吐き出す炭酸ガスの量や、光合成で生産するものも、こういう個別の研究は進んでいるし、今後に進むが、それだけでは無理である、と。まだ不十分な科学・技術、医学で見落とされているすべてを、*Als Ganzheit*、トータルシステムとして対応していかなければ、この限られた地球で、人類は生き延びていけないのではないか。

今でこそ、そういうことを言う人もいませんが、シュミットヒューゼン教授がそれを言ったのは、今から四十年前、二十世紀の後半です。そして一九六〇年代、七〇年代、シュミットヒューゼン教授は「二十一世紀は『新しいゲートの時代 (Neue Goethe Zeit)』、新しい総合の時代である。一平面だけ見たのでは、一時的にはうまくいっても、地球上では自然の生物社会の一員として生態系の消費者、森の寄生虫の立場でしか生きていけない、われわれ人類が生き延びるためには、<sup>(4)</sup>きわめて危険である」とくり返していたのが、今でも鮮明に記憶に残っています。

すでに二十一世紀になって、まもなく四半期を過ぎようとしています。まだ世界は科学も技術もすべて計量万能主義です。それはどれだけのちに、環境に、あるいは自然にたいする対応に重要ではあっても——あえて申し上げます——「今の不十分な科学・技術、医学で測定、計量化できないものは非科学的である」という考えが、学界を含めてあらゆる分野で、すべて前提になっているのが、問題なのです。

(宮脇昭『<sup>(5)</sup>見えないものを見る力——「潜在自然植生」の思想と実践』による。出題の都合上、一部改変した箇所がある。)

(注1) 霞が関——東京都千代田区の地名。中央省庁が集まっていることから、行政を象徴する語としても使われる。

(注2) 潜在自然植生——植物生態学の用語。人間が一切手を加えないと仮定した場合にその土地で生じると

想定される植生のこと。日本では筆者が提唱した。

(注3) シュミットヒューゼン——ドイツの生態学者。筆者はシュミットヒューゼンの著書を翻訳している。

問1

傍線部(ア)と(ウ)と同じ漢字を含む熟語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、  
15  
17

(配点6点)

(ア) サクゴ

15

- ① 労働者をサクシユしていた経営者。
- ② 本の末尾にあるサクインを使う。
- ③ 解決のためのヒサクがある。
- ④ 喜びと悲しみがコウサクする。
- ⑤ 若い頃の小説をカイサクする。

(イ) カンリヨウ

16

- ① センリヨウが集まる衆議院。
- ② ドウリヨウを誘って食事に行く。
- ③ 注文した品をジュリヨウする。
- ④ その理由は一目リヨウゼンだ。
- ⑤ 鉄道シャリヨウを撮影する。

(ウ) フツウ

17

- ① フダンの生活に運動を取り入れる。
- ② 町長が産業の誘致にフシンする。
- ③ 目に見えない埃ほこりがフユウする。
- ④ 仕事が重なり社員にフカがかかる。
- ⑤ フメンを暗記して本番に臨む。

## 問2

空欄

A

く

D

を補うのに最も適当なものを、次の①～⑧の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。ただし、同じ番号は一度しか選べない。解答番号は、A 、B 、C 、D 。  
(配点8点)

- ① しかし  
② いまだに  
③ なぜなら  
④ したがって  
⑤ しかも  
⑥ たしかに  
⑦ すなわち  
⑧ もしも

問3

空欄

X

解答番号は、

22

・ 23

Y

を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(配点4点)

X

22

- ① 思想的な
- ② 相補的な
- ③ 利那的な
- ④ 科学的な
- ⑤ 大局的な

Y

23

- ① 当然予測の圏内であつて
- ② 見かけにだまされた結果で
- ③ 全く被災地特有の現象で
- ④ 絶対に阻止すべきことで
- ⑤ 行政の責任となるのであり

## 問4

傍線部(1)「死んだ材料」を使つての技術の結果」とあるが、どういふことか。その説明として最も適當なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、24。(配点6点)

- ① 人々の命を育んできた、その地方固有の自然環境や民族固有の文化に根ざす成果ではなく、人為的に画一化された文明の産物であるということ。
- ② 自然に貯蔵された化石燃料を元にしたものではなく、原子力などの人工的な手段で作られたエネルギーを生活に使うようになったということ。
- ③ 自然に生きている動物を狩猟によつて捕獲したものではなく、酪農や養殖によつて得た肉を材料として規格化された食物であるということ。
- ④ 現代も暮らしている民族の技術ではなく、生き延びることのできなかつた民族が残して誰も使わなくなつた技術を開掘して使つたということ。
- ⑤ 樹木や動物などに由来する有機的な材料を用いたものではなく、鉄やセメントなどの無機物を多用してインフラが構築されているということ。

## 問5

傍線部②「自然は常に動いています」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、25。

(配点5点)

- ① 植物群落や木は、生えている土地固有の条件によって育ち方が変わるため、目に見える形はさまざまということ。
- ② 植物を見るときの概念や発想は、前例のないものが次々に現れ、それがただちに受け入れられているということ。
- ③ 常識から外れるように見える物事であっても、計量的な実証を施すことで、誰もが納得できる姿になるということ。
- ④ 自然環境は地域により多様な姿を見せ、長い年月の間に変化するため、固定観念でとらえてはいけないということ。
- ⑤ 前例のない異端の仮説は、科学の活発な活動によって間違いが立証され、修正されていくことが多いということ。

## 問6

傍線部③「これは科学ではない、忍術だと思う方もいらっしゃるかもしれませんが」とあるが、なぜそのように想定されるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、26。

(配点5点)

- ① 長持ちする自然を分析するには長時間にわたる観察が伴うため、忍耐力を問われる、という先入観があるから。
- ② 理論や実験のほかに、自ら現地で観察し、自然の発するかすかな気配から予兆をとらえる必要があるから。
- ③ 先例のない発想をしてシステム化を推し進めるには、不可思議な思考が必要になることが、明らかであるから。
- ④ 忍者のように自分の身体を武器にして情報を得ることは、五十年前にはドイツでは不可能なことだったから。
- ⑤ ゲーテが文豪として知られているため、生態学への提言をしても、説明のつかない予言のようになるから。

## 問7

傍線部(4)「森の寄生虫の立場でしか生きていけない」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、27。

(配点5点)

- ① 全体として見る力を持たないままでは、人類は生態系において虫に等しい低い地位しか得られないということ。
- ② 森に植える樹種を誤ったことで枯らしてしまい、森の破壊につながる失敗を人類がくり返してきたということ。
- ③ やがて人類を含めた地球の生物の大半が滅亡せざるを得ず、虫のような微小な生物だけが生き残るということ。
- ④ 地球の生態系の一員である人類が、自然と共生せず、地球資源を自己利益に使って地球に害をなすということ。
- ⑤ 現時点の科学・技術や医学で計量化ができないものが、生き延びるために不可欠であったということ。

## 問8

傍線部⑤「きわめて危険である」とあるが、シュミットヒューゼン教授はどのようなことを「危険」と言っていたのか。

その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

28。

(配点6点)

- ① 計量主義的な科学が英語圏内という限られた地域でしか発展しておらず、全世界で共有されていないため、足並みのそろわない人類は、生態系の中でいずれ生き延びることができなくなるといふこと。
- ② ドイツがエコロジー発祥の地であるにもかかわらず、二十世紀の後半に至って計量科学としては英語圏に後れをとつてしまい、個別の研究に寄与できていない状況になってしまっているといふこと。
- ③ 計量主義的な科学が発展してかなりの時間がたっているにもかかわらず、まだ計量が不可能であるとされている事柄が残されており、それがやがて人類をおびやかす存在になりうるということ。
- ④ 計量万能主義が世界でいまだ主導権を握ってしまっているため、そこで測れないものは無視され、科学の発展が学問全体から見れば偏った方向へ向かい、やがて後戻りができなくなるといふこと。
- ⑤ 英語圏の科学は、見えるものを扱うことだけは進歩しているが、見えないものを非科学的だと見なし、人類が生き延びるための全体を見ずに自然を消費し続けていけば、いずれ人類の営みは破綻するといふこと。

## 問9

本文の内容に合致しないものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

29。

(配点6点)

- ① 自分だけが持っている能力を發揮して課題に対応する人生観は、地方固有の文化を大切にすることと相通じる。
- ② これまでの経験の積み重ねに納得しそれを守ることも、今の人びとのいや生活にとっては大切なことである。
- ③ ゲーテはもっぱら文芸的な文章を書く立場だったからこそ、生物学の計量化を批判する提言をなすことができた。
- ④ 筆者は自分の身体を測る器械にして自然のかすかな予兆を見つつ、森を作る植樹をこれまですべて成功させてきた。
- ⑤ 現代に至ってもあらゆる分野で科学は計量主義がすべてとやっていい現状であることを、筆者は憂慮している。